

2008年(平成20年)

第12号

(12月15日)

# 平安月報

The HEIAN monthly report

発行所：立正佼成会 京都教会

発行責任者：渉外部長 宮地啓安

〒605-0041 京都市東山区三条蹴上

TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

## 「門川京都市長との懇談会」開催 (京都明るい社会づくり運動連絡協議会)



11月22日、京都普門館において、京都明るい社会づくり連絡協議会(京都・明社)の主催による、「門川京都市長との懇親会」が開催された。京都・明

社の各地区明社の会長、副会長、運営委員長など、約40人が参加し、門川市長との交流を深めた。

まず、門川市長から「“共汗”と“融合”で地域主権時代を拓く」と題して講演があった。市長に就任して9ヶ月、市政に取り組む意気込みを熱っぽく語った。

徹底した「現地・現場主義」から「現場に神宿る」と実感。市政がかかえる課題に対して、「全庁“きょうかん(共汗)実践”運動」を展開。

京都が持つ力「京都力」について語る。京都の特性の一つに「宗教」をあげた。例として、辻々にある「お

地藏さん」が市民生活とともにあると示した。

祇園祭は66基の鉾から始まった。その当時の国の数で、祇園祭は世界中の平和や安寧を願って始まった。つまり、建都のコンセプトが「平安」だ。

現代は、社会や大人は欠点を指摘し合って、暗い社会を作っている。つい自分を変えず、相手の欠点を正そうとする。そうではなく、良いところを見つけ、欠点を補い合う。みんなが一番にはなれないが、一流になれる。お互いが良いところを見つけ合うことの結果が、明るい社会づくりになる。と、明社運動に対してエールが送られた。

「過去や相手は変えられない。しかし、未来や自分を変えられる。」というメッセージに参加者の多くは共感を得たようだった。



## 京都・祇園祭ボランティア21

11月15日に京都・祇園祭ボランティア21創設25周年記念パーティーがからすま京都ホテルにて開催された。山田知事、門川市長、八坂神社宮司、鉾町代表者をはじめ、ボランティア各加盟団体代表者が集まり、和やかに25年の歴史を振り返るとともに、これからのボランティアの活躍に期待を寄せられた。

このボランティアは7月17日の祇園祭山鉾巡行の曳き手を担い、25年間で



述べ1万人のボランティアが携わってきた。加盟団体の代表者は担当する各鉾町の責任者の方々と当日の打ち合わせをし、また団体内で参加の呼びかけを行い、6月下旬には八坂神社での全体事前説明会と御祓いを行う。現在では数ヶ月にわたるこの一連の流れが定着したが、創設当初は試行錯誤の連続だったようだ。このボランティアの前身である京都青少年活動推進会議を立ち上げたものの曳き手の人数が集まらず大変苦労し、たまたまその年の巡行が月曜日だったことから理美容の青少年団体に協力要請を行い、無事担当8基の山鉾を担うことが出来たと披露されていた。現在では合計32基の山鉾のうち21基を任されるほど、このボランティアが年々その重要性を増している。

筆者が感銘を受けたのは、このドラマに悪人が登場しないことだ。安政の大獄を引き起こした井伊大老も本来は善人だと、演じられていた。法華経には、すべての人は『仏の子』と説かれていて、「一方は善で一方は悪だ」と見ているのは、神仏ではない。私たちが人間なのだ。人間賛歌のドラマに仕上げるという篤姫の脚本家・田淵久美子さんの描いた世界にしたいものだ。

## 時事刻々

今年もあとわずかなり、いつものようにわただしい日々が続いている。しかし、景気低迷からか、何となく新年を迎える気分になれない人も多いのではないだろうか。

暗い話題が多い中、今年のNHKの大河ドラマ『篤姫』が過去5年間で最高の視聴率を上げる勢いだ。幕末の波乱の時期を自らの力で切り開く篤姫に感動や勇気をもたらした人もあるだろう。

## 諸宗教対話のコーナー

### 宗教協力

宗教協力の実践として、前回に引続き新宗連（新日本宗教団体連合）の青年の集まりである新日本宗教青年会の近畿地区の教団交流会出席の報告を引続きさせていただきます。

①挨拶の実践②食前・食後の感謝の実践③校門で一礼の実践④整理整頓⑤思いやりの実践。以上の五つの実践を通し宗派を乗り越え宗教心を育む取り組みを各教団で頑張ろうとみんなで決意し研修が終了した後、懇親会が行われました。もちろん酒席になるのですが、かつて庭野開祖はお酒が進めば進むほど宗教談義に華が咲いたといえます。

田応教・パーフェクトリバティ（PL）教団・大

慧会教団の皆さんと宴席を共にし、話とお酒が進むにつれ、教団同士の意見の違いが見え隠れします。

筆者は他教団の方に、教えとは本来こう在るべきだと説得してしまいそうになりました。違いを指摘したり、相手を説得すること自体、宗教協力とは正反対の行動です。この心がやがて他の宗派を許せなかったり、自分の宗教が正しく他の宗教は間違っていると考え、世界各地で起こっている争いの根本原因になるでしょう。

そんな心が自分の心にもあることを素直に懇親会の席で懺悔させていただきました。様々な宗教を持つ青年とこれからも触れ合い、宗教協力の大切さを学びたい。そして、京都の宗教者の方ともっと触れ合い、世界平和に向けた行動を共にしたいと念じます。

## 私のほのぼの日記（京都佼成議員懇話会に参加いただいている議員さん方のコーナーです）

### 冷静かつ温かみある政治家に

京都府議会 中小路 健吾

“Cool Head & Warm Hart” ケンブリッジ大学の初代経済学教授を務めたフレッド・マーシャル（1842～1924）が、その就任記念講演で述べた言葉です。社会的苦悩を克服するために、「冷静な頭脳と温かい心情」をもって最善の能力を捧げる人材を一人でも多く育てたい。そんな願いが込められています。

少子高齢化に伴う将来への不安、世界を取り巻く金融危機、地球温暖化などの環境問題、私たちの目の前には数多くの問題が山積しています。

これらの課題を解決するためには、一時の感情に流されず、冷静に現実を見つめ、大多数の国民生活の幸福を築くために、冷静な政策立案能力を、優しく温かい心を忘れないことでしょう。今、私たち政治家に求められているのはまさに“Cool Head & Warm Hart”ではないでしょうか。

### ご縁と感謝

京都府議会 豊田 貴志

生まれ育った山科区から、京都府議会議員に当選させていただき、1年8ヶ月が経ちました。政治を志し、前原誠司衆議院議員の秘書を経て、今日まで約5年になります。

この5年間、多くの方々との出会いを通じて「ご縁」の有難さを感じる日々を送っています。特に議会では、私を前原代議士に紹介してくださった、大学の先輩の中小路府議会議員をはじめ、多くの諸先輩諸氏に「感謝」の気持ちを忘れずにいたいと思っています。

そして、「我灯明」と言われないように、主張すべきところは主張し、抑えるべきところは抑えていきたいと考えます。

今後、「ご縁」を「ご支援」に変え、「ご支援」に感謝し、地域に根ざした府議会議員として活動して参りたいと思います。

### 一食を捧げる運動

平成20年次「一食ユニセフ募金」の総額が、このほど青年本部から発表されました。昨年11月1日から今年10月31日までに寄せられた募金の総額は、7849万3482円。浄財は、ユニセフ（国連児童基金）を通じ、アジア4カ国の教育事業などに充てられます。

一食募金には一般市民から献金される「一食ユニセフ募金」と会員から献金される「立正佼成会一食平和基金」に区別されています。今回発表されたのは「一食ユニセフ

募金」。市民から寄せられた浄財は、ユニセフを通じ、本会が用途を指定する「指定拠出」として、ネパール、カンボジア、フィリピン、東ティモールのアジア

4カ国初等教育などの教育事業に充てられます。このほか、5月に発生したミャンマー・サイクロンならびに中国・四川省大地震の被災者支援として合計1500万円の緊急支援が行われました。



## 仏教を生活に生かす 「日常生活の中の仏さまの教え」

### 《百パーセント救われる》

法華経は、こんな病気にはこの薬、こんな症状にはこの療法といった対処療法ではなく、あらゆる病気を根こそぎ治し、あらゆる人間を完全な健康体にする根本療法ともいうべきものなのです。

庭野開祖は法華経に出遭ったとき、「法華経こそ、すべての人を百パーセント救うことのできる教えだ」と感激しました。それは「素直に法華経を読みさえすれば、必ずすべての人が救われるようになっている」ということを実感したからです。素直に法華経を読むとは、どういうことでしょうか。

百パーセント救われるために、私たちは法華経をどう学び、どう実践していけばよいのでしょうか。救われるとはどういうことなのでしょうか。それは単に、修行すれば問題を解決できるとか、精進すると願いが叶うということではないはずです。

仏教の基本は「世の中のすべてのものごとは『因』と『縁』の出会いによって存在する」という縁起の教えです。つまり、何か起きたときには、その出来事を直視し、原因を探求し、それを乗り越えていくことで苦から離れられるというものです。ですから「幸せになりたければ、悪をなさず、よき因となり、よき縁となればよい」という教えなのです。

けれどもそう教えられたからといって、すべての人がすぐに自分の行動を変えることができるでしょうか。私たちは自分自身の行動、心さえも、思い通りにできないというのが現実です。そうだとすれば、幸せになれるのは、特別に強い意思を持った、ひと握りの人だけということになってしまいます。それでは百パーセントの救われにはなりません。

庭野開祖は「お釈迦様も、菩提樹下で悟りを開かれたとき、世の中は因縁によって成り立っているということを悟られた。だけど、その因縁をどう解決するかという本当の悟りの境地は、法華経に入ってから分かったんですよ。だから、法華経が分かればみんな分かるんですよ」と、百パーセント救われる本当の法華経の見方を身につけることの大切さを説かれました。

善因善果・悪因悪果という因果説のなかで、庭野開祖が見ていたものはいつも「善因善果」でした。法華経に出遭ったことで、根本仏教の教えを一步進めて「常にまわりの人をよい因、よい縁と見る」という「善因善果」を選ばれたのです。それが因果説を法華経の智慧で生かすことであり、すべての人が百パーセント救われる法華経の縁起観です。

「法華経ですべての人が百パーセント救われる」というのは、出会うことすべてを幸せの因と見ることで、人は皆幸せになるために生きている、と信じるのが法華経の見方だからです。

このような見方をすることで、私たちは幸せに気づき、本当の喜びを得ることができます。だからこそ、法華経の教えで救われるといえるのです。「出会う縁によって、自分がいつも幸せになる道を歩んでいる」と信じるのが、救われの第一歩です。

それを毎日の生活を通して、確認していけばよいのです。信仰をしないと救われない、というのではありません。救われていることに気づいてないだけで、みんな救われているのです。救われることに決まっています。ですから大切なのは、出会うすべての人を常に幸せの因と見る訓練をすることなのです。気づきは、人とのふれ合いの中にこそ生まれます。

あるご夫婦が、たまたま同じ日に腕を骨折してしまいました。夫は勤めに行くことが出来ないし、自分は家事もできない。落胆する奥さんにこんな言葉が贈られました。「ご夫婦が一緒に骨折したからこそ、痛みや辛さを理解できてお互いを思いやれる。心を通わせるいい機会ですね。きっと仲のよいご夫婦なんですよ」

自分たちの何が悪くて、こんなよくないことが起きたのかと思うと、相談することがためらわれ、不安な気持ちでした。けれども、夫と心を通わせる機会だと言われ、そう思えば心がほっと温かくなり、嬉しくなりました。私たちはつい、悪いことにとらわれて苦しみ、それを直すことで幸せになれると思ってしまいます。けれども、それでは百パーセントの救われにはなりません。直すことを目的にすると、難しくなってしまうのです。

いろいろな現象は、すべて私たちが幸せになるために、必要あって出てくる神仏からのプレゼントです。そう信じてみると、日々のあらゆる出合いのなかに、私たちを生かそう、幸せにしようとする神仏の願いを感じ取ることができるはずですよ。そして、どう生かそうとしているのか、目を凝らして見つけ出す努力を試みるのです。それが分かったとき、私たちはすでに救いの中に生きているのだと気づき、喜びの世界が展開していくのです。

法華経の世界は喜ぶ世界です。喜びを発見し、神仏のはからいと見ている自分にふさわしく、救われの世界が時間も空間も超えて展開するのです。そんな世界を体験したいと思いませんか。

## 国際諸宗教対話会議

### イスラーム世界からのアプローチ

イスラーム世界連盟主催の「国際諸宗教対話会議」が7月16日から18日まで、スペイン・マドリード市内のホテルで開催され、各国からイスラーム、ユダヤ教、キリスト教、仏教などの宗教指導者、学者ら二百人以上が参加。日本からは本会の庭野日鏡会長、島本邦彦・大本本部長、板垣雄三・東京大学名誉教授らが出席。また、トニー・ブレア英国前首相、ウイリアム・ベンドレイWCRP国際事務総長らも出席した。

この会議は、サウジアラビアのアブドッラー国王の強い指導性を背景に開催されたもので、サウジアラビアはムスリムの二大聖地であるマッカ（メッカ）とマディーナ（メディナ）を有し、イスラーム諸国の中でも保守的な国として知られ、イスラーム世界で大きな影響力を持っています。

今年3月、アブドッラー国王は、文明間対話の促進を目的にイスラーム、ユダヤ教、キリスト教の三宗教によるサミットの開催を提唱。6月には、マッカに全世界のイスラーム指導者600人が集い、イスラーム世界連盟主催（アブドッラー国王後援）による「世界イスラーム対話会議」が開かれ、諸文化、諸宗教との対話を進める「マッカ・アピール」が採択された。

このアピールを受け、イスラーム世界連盟は、各国の諸宗教者、諸文化の代表に呼びかけて「国際諸宗教対話会議」の開催を決定。同会議は、国際的な諸宗教、諸文化対話における**イスラーム世界からの歴史的なアプローチ**として注目を集め、各国のマスコミにより全世界に報道された。

開会式は16日、マドリード郊外にあるスペイン王室のサルスエラ宮殿で行われ、カルロス一世国王、アブドッラー国王、スペインのサパテロ首相が臨席。このあと、オーディトリウム・マドリード・ホテルに会場を移し、18日まで、『対話の宗教的・文化的基盤』『人間社会における対話の重要性』『対話の分野における人類共通の価値』『対話の評価と発展』『対話と共生の文化の推進』をテーマに活発に意見が交換された。

17日午前の第二セッションでは、庭野会長がスピーチを行った。庭野会長は、庭野日敬開祖の「一乗の精神」、WCRP（世界宗教者平和会議）の活動などを紹介しながら、諸宗教対話・協力が時代の要請である

※今月号は「庭野開祖の宗教観・平和観 一乗の道」をお休みとさせていただきます。

### 渉外部からのメッセージ

早いものでもう師走。この平安月報を創刊してから一年が経ちました。日頃、渉外部スタッフは各々の持ち場で活動していますが、この紙面作りでは一丸となって編集作業を進めることが出来ました。また原稿をお寄せ頂いた皆様にはこの紙面をお借りしてお礼申し

と言及。法華経の『常不軽菩薩品』の一節に触れ、人々が真に調和するには、いのちを尊重し、愛や慈悲、思いやりの心を培っていくことが不可欠であると強調した。また、宗教の根底には共通の普遍の真理があるとし、宗教者が手を携えて前進していくことの必要性を訴えた。

### 《庭野会長談話》

会議の間、各セッションに参加し、それぞれの発言を聞かせて頂きましたが、世界各国のイスラーム代表が、非常に広い視野で諸課題に向き合っていることを実感致しました。また、イスラームの持つ寛容性についても再認識することが出来ました。

イスラームに対しては、一部の過激主義がマスコミ等に取り上げられ、誤った先入観を抱きがちな状況も否定できません。それは多くの場合、イスラームの教えや信仰生活、歴史などに対する理解不足から生じているものでありましよう。

とりわけ日本では、イスラームの教徒の数が約一万人と推定されており、イスラームへの関心が決して高いとは言えません。会議の様子が、世界各国で大きく報道されたのに比べ、日本ではほとんど伝えられなかったのも、その表れのひとつも思えます。

今回の会議について、カトリックの「**第二バチカン公会議**」に匹敵する**歴史的な出来事**、と表現する人もおられます。その評価が真に正確なものかどうかは別にしても、これからの展望が大きく開けたことは、確かであります。

イスラーム教徒の人口は、世界に約十五億人と言われます。その指導者が、対話促進の方向性を明確にし、継続的な取り組みがなされるならば、国際的な諸宗教対話・協力の潮流は、さらに確かなものとなってまいります。**日本の宗教者として、イスラーム世界からのアプローチをどのように受け止め、どう対応していくか。私どもにとって、大きな宿題が与えられたように思うのです。**

### ※第二バチカン公会議

1965年ローマ法王の招きにより、庭野開祖が出席した。この出会いがWCRP誕生のきっかけとなる。

上げます。まだまだヨチヨチ歩きの月報ではありますが、今後も皆様とのつながりを大事にした現場の見える紙面作りに励みたいと思います。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。 RKK 京都教会 FAX 075-762-2266